女性活躍ストーリー

理系学生の新たな働き方。医療、科学分野で活躍するメディカルチーム

紙やWebを問わず、多くのコンテンツや広告物を手掛けるエフスタイル。
中でもメディカルチームの制作物は他社と一線を画すクオリティを誇る。

城南地区

株式会社 エフスタイル

設立年：2007年
資本金：300万円
代表取締役社長：宮田　志保
従業員数：10名
（内、女性従業員数10名）
〒107-0062
東京都港区南青山3-6-7-302
TEL：03-3478-0365
http://www.f-st.biz

会議では新人、ベテランの垣根なく忌憚のない意見が交わされる。地方在住の社員もテレビ会議で参加

取材をする関本恵理子さん

命や健康に携わる仕事

クライアントからの厚い信頼を得て多くの制作物を世に送り出しているエフスタイル。これまでに大手企業や官公庁などの案件も数多く手掛けているが、群を抜いて多いのが製薬会社や医療機器メーカーといった医療分野。これには理由がある。同社には生命科学で修士を取得した人や日本メディカルライター協会の会員など、医療や科学のバックボーンを持つ人材で構成された専門のメディカルチームがあるのだ。

「その分野で権威のある先生に取材をしたり、学会に出席したりしますし、時には裏付けとなるエビデンスを探すために英語の論文を精読することも求められますから、とても付け焼き刃で対応できるものではありません」と話すのはチームリーダーの関本恵理子さん。自身も学生の頃には化学を専攻していたいわゆる“リケジョ”で、医療系の広告には15年以上携わってきた。

「特に多いのが製薬会社の案件です。これには一般の方向けのものと医療従事者向けのものがあります」

一般向けというのは病院のラックに置かれる冊子やwebサイトなどで、例えば骨粗しょう症や高血圧といった病気の予防を啓蒙するようなもの。一方の医療従事者向けは、製薬会社のいわば営業であるMRが医師に渡すパンフレットなどである。

「薬は言ってしまえば単なる化合物。使用方法や効果効能といった基本情報、それに臨床試験結果などのエビデンスが付いてはじめて医薬品になるのだと思います。万が一にも間違ったことは書けませんから神経を使いますが、その分、達成感はひとしおです。何より人の命や健康に貢献できることにやりがいを感じています」

読み手によって表現を変える

メディカルチームでは新人も活躍している。入社2年目の松橋亜希さんもその一人。

メディカルチームで製薬会社のパンフレットやさまざまな病気の啓蒙記事を執筆・編集する松橋さん。同社を「社長とも普通に世間話ができるアットホームな会社です」と話し、「やりたいことがあったらどんどんやらせてくれるのでやりがいは十分」と意欲満々に語る。原稿を書く上では読者の違いによって表現を変える工夫をしているという。

「医療従事者向けであれば専門用語を使っても通じますが、一般の読者には通じません。ですから読み手によって使う言葉を選んでいます。また、啓蒙といっても、『こうしなさい』と上から押し付けるよりも、『こういう悩みがありますよね』という風に寄り添うような立場で書いたほうが読者に届くと思うので、書くときの姿勢にも気をつけています」

この仕事を多くの人に知ってほしい

そんな松橋さんは大学院時代には再生医療の分野で研究を行っていた。学んだことを仕事に活かしたいという思いが強く、研究職を中心に就職活動をしていたが、なかなか決まらなかったという。

「大学院で取り組んでいた研究は、すぐに結果に結びつかなくても将来役に立つであろうというものでした。それだけに、利益を追求する企業には理解されにくかったんです。そうした研究のギャップに悩み、就職活動へのモチベーションが落ちていたのも確か。そんな時に出会ったのがエフスタイルです。ここには学んだことを活かせる仕事があり、情報を発信することで多くの人の健康を守れると思ったんです」

分からないことが分かるようになると嬉しいという松橋さん。取材や学会などで各方面の最先端医療に触れられるのも、この仕事の楽しさの一つと話す。前述の関本さんは「理系のバックグラウンドを活かして情報を発信するというこの仕事はまだまだ知られていません」と話す。研究室に所属していても就職先が見つからず他分野の仕事に就く学生は少なくない。この仕事は、そうした理系学生たちの新たな働き方になるかもしれない。

メディカルチームのメンバー

取材に向かう松橋亜希さん

女性の働き方について語る宮田志保社長

松橋亜希さん

編集部「ハツタロー・ケンジロー」メモ

子どもがいるから日々が輝く

同社の宮田志保社長は女性のキャリア支援活動も行っている。

「将来、結婚や子どもができたら仕事が続けられなくなってしまう、あるいは続けられても大変だろうと考えている人が多いと思います。私もそう思っていましたが、実際は違いました。子どもの顔を見れば嫌なことを忘れますし、子どもがいるから毎日楽しい。子どもがいるから働けるんです。発想の転換をして、結婚や出産といったライフイベントを楽しみにしてほしいです」

同社には育児をしながら働いている従業員が少なくない。こうした理解ある職場であれば将来の不安なく働いていけるに違いない。

▶さらに詳しい会社情報は　東京カイシャハッケン伝！ サイトへ ≫